
窓辺

bluewind

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

窓辺

【Nコード】

N4056C

【作者名】

bluewind

【あらすじ】

とある田舎の学校に引っ越してきた少年の体験。寒い冬の教室の窓辺に、一人の髪の毛のとても長い少年がおりました。初めて見た時はチョット不気味で怖かったけど、ふと見せた少年の弱々しげな瞳。はたして彼は……？

（前書き）

短編小説です。

原稿用紙に清書を書いたのですが、こちらには、その前にパソコンで書いた時のプロトタイプを載せます。細かい部分の修正ぐらいで、中身はほとんど同等です。

救いは無しの話です。後味の悪い話が苦手な方は御注意下さい。

いつか、どこかで、ある少年が体験した不思議な話です。

少年はこの秋、とある田舎の学校に転校してきました。

少年は心優しい子で、すぐに新しい皆と仲良くなりました。

そして、少年が見た、不思議な体験というのは、その年の冬のことでした。

ある雪の降りしきる冬の午後、学校での放課後のことです。

その日は皆、すぐには帰らず、教室で笑い話をして遊んでいました。するとふとした拍子に、少年は持っていた鉛筆を落としてしまいました。

思わず慌てて拾おうと屈もうとしたら、別の髪の長い少年が、それを代わりに拾ってくれていました。

髪長の少年は鉛筆を差し出したので、少年は手の平を出すと、そこにそれを置いてくれました。

「ありがとうございます」、そうお礼を言おうとしたのですが、髪長少年は、すぐに離れていってしまいました。

そして髪長の少年は、窓辺の方に行くと、窓枠の狭い間に腰を下ろしました。

髪長少年は、少し頭を俯かせた為に、顔がはっきり見えません。

少年は何だか不気味な感じがしました。

あの黒い厚い髪の奥から、ぎらぎらとした獣のような眼が、こっちを睨んでいるような気さえしてきたからです。

何とも気持ち悪くて、思わず目を勢いよく逸らして、慌てて周りで騒いでいた笑い話に加わりました。

しかし落ち着かない少年は、ちよっとするとすぐに、鞆を持って帰ってしまいました。

次の日、いつもよりずっと早く目が覚めた少年は、少し急いで準備をして、学校に行きました。

その日は晴れていたものの、昨日の雪が随分高く積もり、膝まで埋めて雪の中を走っていきました。

ゆっくり向かっていると、昨日のこともあって、体から心の芯まで凍らせられるような気がしたのです。

そして少年は誰よりも早く、教室の扉を勢いよく開け放ちました。

そして視線を一番、あの窓辺へと向けました。

すると、驚いたことに、あの髪長少年は、昨日とまったく同じ格好で、固まったように座っていました。

そして、同じようにその子の顔は黒く隠れていました。

少年はしかし、今教室を出て行くことを躊躇いました。

ここで後ろを向いたら、あの髪長少年に首根っこを掴まれて潰されてしまうのではないか、という気がしたからです。

しかし扉の前にいつまでも立ち尽くしているわけにもいかず、仕方なく少年はそっと、足を擦るようにして音無く教室に入りました。

少年はすぐに席に着くか迷いました。

やはり、背中を見せるのが何となく怖くて、思わず髪長少年を凝視してしまふのです。

髪長少年は依然、長い髪で顔の全てを真っ黒にして、物言わず座り込んでいます。

少年は思い切って、その髪長少年の下へ、向かって行きました。

例え不気味で怖いといっても、同じ教室にいる仲間です。

少年は出来るだけ笑顔を見せるように努めながら、ゆっくりと震える足を窓際へと向かわせました。

あと数歩という所で右手の平を上げ、少し硬い調子で「おはよう」と声を掛けました。

髪長少年は、ただ黙っています。

黒い長い髪も、びくりとも動く気配がありません。

「早いね。雪も積もって、凄く寒い」

しかし、髪長少年は、少年の姿など全く見えていないように、首も振らず、じつと座っているだけです。

何だか少年は、無性に腹立ってきました。

何故、この髪長少年は、掛けた一声にも応じてくれないのでしょうか。何故、この髪長少年は、ただ黙って窓辺に座り続けているのでしょうか。

怒りを超えて悲しくなってきた少年は、さっきまでの怖かった感情など忘れてくるりと踵を返しますと、自分の席に急ぐように向かいました。

そして席に座って、苛立たしく頭を机に伏せて目を瞑り、無音の間が数分流れた時、ふと少年は思ったのです。

自分が転校してきて数ヶ月、何故、何故、今までの髪長少年のことを、知らなかったのだろうか、と。

その日、少年は皆と運動場で、雪合戦をして遊びました。

今日は本当に天気が良く、太陽で雪が少し解け掛けていましたが、暖かくて外で遊ぶに絶好でした。

少年は小さな身体を精一杯振って、力強く雪玉を投げていました。すると、少年の手が冷たさでかじかんでしまったのでしょうか、思いがけず握りが甘く、間違って変な方向へ投げてしまいました。

そしてその玉が、これまた思いがけないところへぶつかってしまったのです。

後ろからでもはっきりと分かる、黒い髪長のあの子の頭の後ろに、当たってしまったのです。

少年は、これまでに感じたこと無いほど、強く心臓が跳ね上がりました。

少年は髪長少年が、すぐにあの長い髪を振り乱して、自分の方を鋭く睨むだろうと思い、恐れました。

しかし、です。

髪長少年は、真っ黒い頭に白い粉を付けて、微動だにしません。

そしてそれどころか、一度も振り向くこともせず、そのまま、何事も無かったかのように足を動かし始めて、過ぎ去ってしまったのです。

少年は呆氣に取られて、しばらく呆然と、髪長少年の行ってしまった方を、ぼんやり口を開けて眺めていました。

そして、その少年の横顔に、突然特大の雪玉がぶつけられ、顔が雪塗れになりました。

「ぼおっとしてると危ないぞ」

手で顔の雪を払うと、遠くに逃げながら新たに雪玉を作ろうとしている友達の姿が見えました。

「よくもやったな」

そう少年は言い返して、自分もすぐしゃがみ込んで雪を掻き集めて玉を作ると、走ってその友達の方へと追い掛けていきました。

いつの間にか少年はまた雪遊びに夢中になり、体中がびたびたと濡れるまで、夕日が消えてしまうまで、走り回り遊んでいました。

そしてある日、少年はあの髪長少年について、驚くべき真実を知ることになりました。

その日は、学校の放課後、教室に皆が残って、大切な話し合いをしていました。

それは、彼らの学級の受け持ちだった先生が、今度の春までで退職をすることを知ったからでした。

それで学級委員の女の子が、お別れ会を開こうと言い出したのです。皆は先生のが大好きで、勿論皆が一斉に大賛成でした。

それで、残れる子は可能な限り、放課後に集まって、お別れ会について話し合いをすることになったのです。

お別れ界では出し物をするようになって、幾つか別々に班を作って、それぞれで何をするかを決めるところまでできました。

少年は仲の良かった男の子二人と女の子一人で、一緒に班を作ることになりました。

そして何をするか、隠し芸か、手品か、それとも先生や皆が集合した絵を描いて送るか、話し合っている時でした。

男の子二人が興奮して、叩いたりしてふざけ合っている時、一人の子の肘が机にぶつかり、勢いで上に載っていた鉛筆が落ちてしまいました。

二人は相変わらずふざけ合っていて、落ちたことにまったく気付いていません。

それで少年は、自分が代わりに鉛筆を拾ってあげようと思いました。すると、少年が拾うために腰を下ろそうと屈んだ時、先に正面の反対側から、誰かが腰を落として鉛筆を拾おうとしました。

その時にその誰かが頭を下げたので、黒い髪が幕のようにだらりと垂れたのが、少年に見えました。

よく見たら、そう、それはあの髪長少年だったのです。

少年は思わず慌てて、屈みかけた腰を一気に上げて仰け反りました。そして改めて見たら、そういえば自分はこの窓際の辺りの机に集まって、話し合いをしていたことに気付きました。

そして、髪長少年を見ると、今は近くににいるせいか、髪長少年が屈んで鉛筆を拾って頭を上げた勢いのせいか、前の方の髪が幾らかずれて、ちらりとその顔を見ることが出来ました。

その髪長少年の顔は、目が優しそうに見えました。

いえ、優しいというよりむしろ、何か怯えているような、そんな弱弱しさを感じさせるような、薄い湿り気を持った瞳だったのです。

少年は、驚き、慌てました。

以前、少年が感じていた、あの怖い瞳は、どこにいったのでしょうか。いえ、果たして本当に、自分はこの髪長少年から鋭い視線を感じたことがあったでしょうか。

何か、何か違和感を感じたのです。

髪長少年は、驚き凝視している少年の視線など気にしない風に、すっとその拾った鉛筆を机の上に置きました。

すると、ちょうどよく見れば、そのふざけ合っていた男の子が、何

かを探すように机の上を見回していたのが少年に窥えました。

そして、机に置かれた鉛筆を見た男の子は、少年に言ったのです。

「鉛筆拾ってくれたんだ。ありがとう」

思わず少年は言い返しました。

「うっん、僕じゃなくて、あの子が拾ってくれたんだよ」

そして少年は、いつもの窓枠に座り込む、髪長少年の方を指差しました。

しかし、

「あの子って？」

少年は、さっきよりもっと、不思議な気持ちになりました。

「その窓の所に座ってるでしょ」

「誰も、いないよ」

少年は、ますます混乱しました。

この男の子はふざけているのでしょうか。

少しむきになって、少年は、相手を叩くような勢いで髪長少年を指差しました。

「あそこの、窓の所に座ってるでしょ」

しかし男の子はまったく要領を得ないように首を傾げ、

「とにかく、鉛筆探してたんだ。拾ってくれてありがとうね」

と、それだけ言って、机の上に目を向けて、置いてあるわら半紙に鉛筆の先を向けました。

少年は呆れ顔で、その男の子の顔を窺いました。

しかしどこもおかしなところは無いようで、一生懸命、出し物に関する案を幾つか記しています。

そして振り向いて、髪長少年のいる窓の方を見ました。

髪長少年は、何事も無いように、いつもの格好で窓枠に座り込み、長い髪で顔を隠しています。

少年は、ふと、国語の授業のことを思い出しました。

正しくは、その授業で聞いた言葉を思い出しました。

座敷童、を。

でも、この髪長少年と、悪戯好きの座敷童とでは、やはり違うとも思いました。

ただ、一つはつきり分かったのは、どうも自分だけしか、この髪長少年のことが見えないという、不思議な事実でした。

授業では、座敷童が見えたものには幸福が訪れる、というようなことを聞きました。

果たして、自分はその幸福を与えることができるのでしょうか。それは、少年には信じがたい話でした。

それは、座敷童が迷信だからということではなく、幸福をくれる神様のような人が、さつき見たような寂しそうな瞳をしているはずがないと思ったからです。

そして、少年は思い新たに、この髪長少年のことを、暖かい気持ちで見るとしようと思いました。

次の日。

少年はいつもより早く起きて、急いで学校に向かいました。

勿論目的は、あの髪長少年に朝一番の挨拶をしようと思ったからです。

朝食も急いで喉の奥に流し込むように食べると、鞆を掴んで、急いで野道を駆けて行きました。

そして、早足で校門を過ぎると、ふと目の端に、何か黒い大きい物を見た気がしました。

少年は足を止めて、そつちを振り向きました。

校門の近くには大きな桜の木が植えられていて、その見た何かは、確か桜の木の辺りでした。

黒い、細長い、あの髪長少年が、吊られていました。

何か、幻を見ているような気持ちで、少年は見とれました。

確かに、幻だったのです、あの髪長少年は、自分以外は誰にも見えなかったようです。

その幻が、今、冬の朝の冷たい風に吹かれ、木に掛けられた太い太

い紐が、寂しそうな乾いた音を鳴らしています。

朝日がその木の後ろで輝き、髪長少年は一層、真っ黒に染まっています。

そしてその時、少年の後ろに、数人の生徒が通り掛りました。

「首を吊ってる！」

「きゃあ！」

その子達は口々に、確かにその髪長少年を指差して、騒いでいるのでした。

そして皆が、恐怖に満ちた眼と、緩く曲がった笑みを口元に、湛えていました。

僕は力が抜け、膝を折り、ただただ、その死体を眺めているだけしか出来ませんでした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4056c/>

窓辺

2010年12月5日03時04分発行